

## 言語教育における詩の位置

「体験型授業」による英詩の効用<sup>1)</sup>

菊地利奈

はじめに

現在の大学英語教育における英詩の位置について、学生の作った詩を例に考察することが、この論考の目的である。あるいは、学生の文学への興味が薄くなっている現状をふまえたうえで、英文学、特にその中でも英詩が、英語教育という枠のなかで担える役割はあるのか、あるとすればその役割とはどのようなものかをさぐる、と言い換えてもよいと思われる。

大学の英語教育で「成果」を重視するようになり、学生も「使える英語」を学ぶことを求めている現状において、生活に必要な(と思われる)文学作品を、一般教養の英語の授業で扱うことは非常に困難である。小説でさえも「役に立たない」と学生から苦情がくるといった傾向があるなか、詩となればなおさらである。かつての英文学部などで一般的におこなわれていたような「英詩を鑑賞すること」を目的とした授業のあり方では、「詩なんて自分の人生には関係ない」と信じている学生は納得せず、また、多くの学生は詩に興味がないばかりか、「詩」と言っただけでアレルギーを示すことさえある。このような環境下で詩を扱うためには、「詩が日常(自分たちの生活)に関係していること」、「詩は難しいばかりではなく楽しいこと」、

「実は詩が人生に役立つこと」などを学生に体験してもらえるような工夫が必要ではないかと私は考える。

それでは、実際にどのように「詩は人生に役立つ」のだろうか。「詩が教育の中で果たしうる役割」そして、「詩を学ぶことの実質的な効果」を考えるにあたり、私は、詩から学ぶ「想像力の重要性」に注目してみた。詩を読み書くことを通して想像力をやしなえば、他者の気持ちになり立場にたち多面的に物事を分析できるようになること。日常をまったく違う側面から見ることができるようになり、新しい発見があること。これらを、詩を学ぶことの「実益」として挙げることができるのではないかと考えてみたのである。そして、実際に、学生と英詩を読み、学生に英語で詩を作ってもらう「体験型授業」を実践してみた。<sup>2)</sup>

「体験型授業」とは、詩を読むことを「体験」し、詩の朗読で詩を聞くことを「体験」し、詩を読み聞くことで詩の世界を想像することを「体験」し、想像を通して自分以外のものになることを「体験」し、詩を書くことを「体験」し、自作を人に読み聞かせることを「体験」するというように、学生が自発的に授業に参加し、「体験すること」に重点を置いた授業である。私は授業用に、読むことで「自分ではないほかの何かになってみると、世界がどれほどちがってみえるのか」を感じてもらえるような、読みやすく、想像したも

1) この原稿は、2004年9月25日早稲田大学で開催された日本イェイツ協会第40回大会のシンポジウム「言語教育における詩の位置」での発表と質疑応答をもとに、加筆したものである。

2) 体験型授業については、で詳しく述べている。

のをビジュアル化しやすい詩を選んだ。読んだあとには、その詩をモデルとして、「自分ではない何か」を題材に選び、「何か」の気持ちを考えながら、「何か」の視点から詩を書くというエクササイズを取り入れ、英詩を作ることで、想像の世界にいざなうという方法をとってみたのである。

英語で詩を読む以上、読解の授業はもちろんのこと、英語で書く作業があるのでライティングの授業にも取り入れることができ、英語の表現力がつくという「実質的な」メリットを挙げることもできる。<sup>3)</sup>さらに、朗読テープを聴いたり自作の朗読発表を取り入れたりすれば、リスニングやスピーキングの授業で扱うことも可能である。私の授業では、ペアやグループになって自作を読み上げ、批評や感想を述べるというディスカッション形式をとりあげてみたところ好評であった。ここでは、非常勤先の四つの大学でおこなった「体験型授業」をもとに、現在の英語教育のなかで、詩が生き残れる道と可能性について考察していく。<sup>4)</sup>

3)「表現力」とは「表現する力」や「表現しようとする意欲」のことであり、文法的な意味での英文の力がつくことは別であると考えている。

4)四大学とは、青山学院大学(経営学部三、四年生)、共立女子大学(一、二、三年生)、東洋英和女学院大学(一、二年生)、フェリス女学院大学(一年生)。課題という形ではあったが、結果として詩を作成し、この研究に協力してくれたすべての学生にこの場をかりて感謝の意を示したい。引用した詩を書いた学生には許可を求めているため匿名としている。ここで扱う学生の詩はすべて2004年前期に書かれたものであり、フェリス女学院の学生の例が挙がっていない理由は、学生に詩を返却し、原稿が手元がないことによる。また、例に挙がる回数が多い大学と少ない大学があるように感じられるかもしれないが、大学間で学生の数に差があるので、多くの詩が集まった大学の学生の例は当然ながら多く挙がっていることを了承されたい(集まった詩は220編あまりで、青山学院大学から約90編、共立女子大学から約60編、東洋英和女学院大学から約50編、フェリス女学院大学から約20編)。

・ 詩を学ぶ「実益」とは何か

昨今、「情緒教育」という言葉がよくきかれるようになった。曖昧な言葉であるとは思いますが、個人的には、受験勉強や暗記式を重視した教育では育てにくい「豊かな心」を持った子どもを育てようという意味であろうかと考えている。そして、このいわゆる「情緒教育」に効果的だと思われるのが「想像力」を育てることであり、想像力の育成には、文学、なかでも詩は非常に効果的であると思われる。

もちろん、このような教育は大学ではなく、もっと初期教育段階でなされるべきだという意見もあるかもしれない。しかし、多くの学生がほとんど詩を読むという経験なしに大学に進学しているというのも、不幸な現状なのである。特に英詩ということになれば、中学高校ではほとんど扱われていない。英詩を読む場合には、学生の語学レベルが障害になることもあるので、中学高校で英詩を教えることは難しいとも考えられる。また、英詩を授業で扱うためには専門的な知識が必要な場合もあるので、大学でこそ扱うべきであるとも言えるであろうし、大学で英詩にふれ想像力を培うことは、決して遅すぎる情緒教育ではないと思われる。

「想像力がつくと、なにかいいことがあるのか」ということについては、ダブリン大学大学院トリニティ・コレッジの「クリエイティブ・ライティング」という文学作品を書くことを学ぶコースでおきたディスカッションからヒントを得ている。<sup>5)</sup>最近の文学作品には、公園で偶然みかけた、まったくの赤の他人である少女を殺してしまうというような事件を扱ったものも多く、そのような「理由なき殺人」をテーマにした作品には、実際におきた事件に基づいて書かれているものもある

5)筆者が1999 - 2000年にかけて聴講していた授業。

ことは周知の通りである。実際、このような若者による理由のない犯罪は、文学作品の中だけではなく、現実社会でも増加しているようであるが、ここでは、このような犯罪心理の裏には「想像力の欠如」があるのではないか、ということがディスカッションの的になったことに注目したい。つまり、想像力が欠けている若者が増えたために、このような事件が多発するのではないかと考えたのである。

では、想像力がある場合と、ない場合との違いはなにか。想像力が働いた場合、公園で少女をみかけたときに、その少女にも、自分と同じように家族があること、彼女には彼女の生活があり、日常があることは、容易に思いつくだろう。もし、自分がここで少女を殺してしまったら、家族、友人、あるいはいるかもしれない恋人が嘆き悲しむかもしれないことも考えるのではないか。もしかしたら、彼女はデートの前日で、公演の芝生に横たわりながらロマンティックな夢をみているところなのかもしれない。ここで自分が彼女の人生を奪えば、彼女の未来が絶たれ、そして自分の未来も絶たれてしまうことにも考えが及ぶはずである。一人の人間としての彼女の生活を具体的に想像することができれば、無防備に芝生でうたたねする少女の人生を無残にたつようなことが、はたしてできるのだろうか。もし、殺される少女が自分の最愛の人だったら。もし、自分の愛する人が突然理由もなく殺されてしまったら。このような「もし」について具体的に想像できる人間であれば、犯行におよばないのではないかと議論がかわされたのである。

日本でもこのような若者の犯罪が増え、こどもの情緒教育が議論されるようになった今、詩を読み書くことで培われる想像力の重要性を訴えることには大きな意味があると思われる。英詩を学ぶことが情緒教育に役立つことを証明するのは困難であるが、詩を読み

書くことに教育効果があることは、実際に学生の書いた詩を読めば充分に感じ取れる。

#### 「体験型授業」の方法と目的

英詩を読むだけでも想像力は培われる。しかし、英詩を読むだけでは学生の関心や興味を得ることは難しい。そこで、より「効率よく」英詩の効果を学生に体験してもらえようような授業を作り上げる工夫が必要になる。ここで登場するのが「体験型授業」である。

「体験型授業」とは、「詩を読み、詩を書く」という行為を通して、「他者になることを想像する」授業である。学生は、詩を読み、詩を聞く、ということを経験し、詩という想像の世界で遊ぶ体験をする。その後、自ら詩を書き、他者の目で見るとを体験する。さらにクラスメートの詩を読み、聞くことでクラスメートの詩の世界を体験する。このようなさまざまなレベルでの体験を通して、想像力を培っていくというのが、「体験型授業」である。

詩を黙読するだけでなく、「体験すること」（例えば音読したり、自ら書いたり、あるいは劇風に演じたりなどの行為）が教育効果を持つことは、病院や刑務所、小学校などで、「体験型授業」がとりいれられていることからわかる。ダブリンで活躍する詩人Paula Meehan は、刑務所で服役する女性たちの更正を目的とした教育プログラムの一環として、詩の知識をまったく持ち合わせない人々に詩作を教えた。<sup>6)</sup>根気のいる作業であったが、何度も授業をしていくうちに、詩で自己表現することを学ぶにつれ、彼女たちが徐々にかわって

6) Paula Meehan は1955年ダブリン生まれのアイランド詩人。この話は、詩人本人から直接聞いたもの。Meehan とのインタビューは2000年6月にダブリン城で筆者がおこなったもので、詳しくは*Living Voices from Dublin*, pp.296-320 参照。

きていること、いつのまにか詩作が彼女たちの人生の励みになっていることを感じたと、Meehan は述べている。また、アメリカ詩人 Kenneth Koch は、詩を読むことだけでなく詩を書くことにこそ大きな教育効果があると主張し、書くことで得られる体験がいかに重要かについて、多くの著書を残している。<sup>7)</sup> イギリスでも、*Times Educational Supplement* などをみれば、多くの詩人が小中学校レベルで、こどもたちの詩作に携わっていることがわかる。また、英語圏の大学ではクリエイティブ・ライティング・コースも増え、プロの作家や詩人が指導員としてかわり、学生に詩や小説の書き方を指導している。

私が「体験型授業」のモデルにした教授法も、そのような活動をしている詩人 Matthew Sweeney の著書、*Writing Poetry* からとったものである。<sup>8)</sup> *Writing Poetry* には、一枚の絵を題材に詩を作る、有名な詩の一行目を使

7) Kenneth Koch (1925-2002) は詩人であり教育者でもあり、特に初等および中等教育レベルのこどもたちに詩作を教え、それに関連した著書や指導書を残した。こどもたちが詩を読み書くことの効用については、*Making Your Own Days* の第二章 "Writing and Reading Poetry" に詳しく、Koch が詩を書くことを読むこと以上に重視していたことがわかる。また、*Rose, Where Did You Get That Red?* では、こどもたちと読んだ詩、こどもたちが書いた詩などについて詳しく述べており、教授法の参考になる(著書のタイトルは彼が教えたこどもが作った詩からとったものである)。

8) Matthew Sweeney (1952 - ) は、アイルランド、ドニゴール生まれで、イギリスやヨーロッパ各地で活躍する詩人。こどものための詩や短編も書き、こどものための詩集を編集し、小学校などで Writer in Residence としてこどもたちに詩作を教え、*Times Educational Supplement* ではこどもが応募する詩の評議委員をつとめるなど、多方面で活躍。こどもだけでなくおとなにも詩作を教えており、John Hartley Williams との共著である *Writing Poetry* は、詩人になりたい人のための「詩の書き方」をまとめたものである。エクササイズ18については、同書pp.61-62を参照のこと。

って第二行目から各自が詩作する、与えられた単語をすべて使用して詩を作るなど、四十ほどの詩作エクササイズが解説付きで記されている。その中から日本の大学生、つまり英語を母国語としない十代後半の学生でも興味を持って取り組めるものとして、エクササイズ18を応用し、実践してみた。

このエクササイズは本来、英語を母国語とし詩人をめざす人を対象としたものである。日本の大学生の教授法としては不適切、あるいは難易度が高いと思われるかもしれないが、ここで気をつけなければならないのは、大学生はこどもではないというごく当然のことである。英詩は日本の大学生には語学レベルが高すぎるという理由で、こども用の詩や教材ばかりを扱うと、学生は内容に興味を持てなかったり、馬鹿にされていると感じることもある。このエクササイズのモデル詩として使われているのは、Sweeney の "Fishbones Dreaming" (「夢みる魚の骨」) というこどものための詩であるのだが、Sweeney自身が「おとなだけしか楽しめない詩はあっても、こどもだけしか楽しめない詩というものは存在しない」と強く主張していることからわかるように、Sweeneyの詩にはいわゆる「こどもっぽさ」がない。こどもも読める詩として作られているので難解な単語がなく読みやすいが、内容はこどもっぽくないという意味でも、日本の大学で非常に扱いやすい詩のひとつであるといえるだろう。

#### "Fishbones Dreaming"

Fishbones lay in the smelly bin.  
He was a head, a backbone and a tail.  
Soon the cats would be in for him.  
  
He didn't like to be this way.  
He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he was fat, and hot on a plate.  
Beside green beans, with lemon juice  
squeezed on him. And a man with a knife  
and fork raised, about to eat him.

He didn't like to be this way.  
He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he was frozen in the freezer.  
With lamb cutlets and minced beef and prawns.  
Three months he was in there.

He didn't like to be this way.  
He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he was squirming in a net,  
with thousands of other fish, on the deck  
of a boat. And the rain falling  
wasn't wet enough to breathe in.

He didn't like to be this way.  
He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he was darting through the sea,  
past crabs and jellyfish, and others  
like himself. Or surfacing to jump for flies  
and feel the sun on his face.

He liked to be this way.  
He dreamed hard to try and stay there.<sup>9)</sup>

この詩には、ゴミ箱に捨てられた魚の骨が、  
時をさかのぼり、海の中を仲間と泳いでいた  
幸せだった自分を夢み、その夢の中に必死で  
とどまろうとしている様子が描かれている。  
詩が「魚の視点」から描かれているので、読者  
は、連を読み進むごとにいつのまにか魚の視  
点で世界をみるようになる。授業では詩を一

連づつゆっくりと朗読し、朗読しながらその  
連の状況について説明していく形をとった。

詩の中で、ゴミ箱の中にいるのはいやだと思  
う魚の骨は、幸せだった頃を思い出そうと  
するが、はじめに魚が思い出す過去は、「皿  
の上の乗ってレモンをしぼられ今にも食べら  
れそうになっている自分」である（第三連）。  
当然そんな過去は幸せな自分の姿ではないの  
で、魚はさらに過去の世界を夢みるが、次の  
彼が思い出すのは「他の冷凍食品と冷凍庫に

9) 「夢みる魚の骨」(筆者試訳)

魚の骨はくさいゴミ箱の中にいた  
かれは頭で 骨で しっぽだった  
すぐにも猫がかれを餌にするだろう

かれはこんなのはいやだった  
かれは目をとじ昔を夢みた

昔 脂がのって皿の上で熱々だったとき  
インゲンマメの横でレモン汁をしぼられた  
それから 男がナイフとフォークを持ち上げた  
今にもかれを食べようと

かれはこんなのはいやだった  
かれは目をとじ昔を夢みた

昔 冷凍庫で凍っていたとき  
羊の薄切り 牛のひき肉 それに海老と一緒にだった  
三ヶ月間 かれはそこにいた

かれはこんなのはいやだった  
かれは目をとじ昔を夢みた

昔 かれが網にからまりもがいたとき  
無数の魚たちと船のデッキの上  
そのとき 雨が降っていたが  
息をするには水の量が足りなかった

かれはこんなのはいやだった  
かれは目をとじ昔を夢みた

昔 かれが勢いよく海を泳いだとき  
カニやクラゲや仲間たちを追い越して  
エサをとるために跳ねたり  
日の光を浴びたりしようと水面に近づいた

かれはこんなのがよかった  
かれはそこにとどまろうと必死で夢みた

三ヶ月もとじこめられていた」過去である(第五連)。さらに幸せな過去をもとめた魚は次に「船のデッキで網にかかって苦しむ自分」を夢みる(第七連)。このあたりまでくると、学生はこの「パターン」にすっかり慣れてきて、魚が思い出す不幸な出来事に笑ったりする余裕もでてくるものである。実際に、ほとんどのクラスで、この発想の意外性、魚が思い出す内容が思いもよらないものであった事実、笑い声が起こった。笑いが起こるといことは、言い換えれば、学生が詩の内容を想像しながら楽しんでいるということであり、「想像力をつける練習」は成功しているということである。

この一見単純に見える「パターン」が詩には非常に重要なものであることを、学生は知らず知らず体験し学んでいく。第六連あたりを読む頃には、このパターンがリフレイン効果により身につけている。そして、パターンになれていたからこそ、第七連で異変を感じることになる。なぜならここで、網の中でもがく「彼」が「苦しんでいること」を感じ取るからである。「冷凍庫にいた」という連で笑っていた学生たちは、冷凍庫で「寒い」となげく魚の苦しみまで想像しなかったかもしれないが、魚が網にかかり水からあげられ苦しんでいる、この「苦しみ」にここで気がつくのであろう。この「魚のもがき」から魚の苦しみを想像し、魚の苦しみを共有することで、笑いが消える。「雨がふっていたが／息をするには水の量が足りなかった」というところでは、水が恋しい気持ち、生きたいという願い、そして、死の訪れとあきらめとを感じとってゆく。

このようにして、おもしろがって読んでいた詩に「なんだかあやしい雲行き」を感じとる。だからこそ、最終連を読み終えると、「魚がかわいそう」という感想をもち、しみりした顔つきになっている。この心の動き

を、学生は数分の詩の朗読の間で体験するのである。「もし自分がゴミ箱に捨てられた魚の骨だったなら……？」と、魚の骨の視点から世界をみると世界が違ってみえることを体験する。英語の授業で教材として、新聞記事などの「事実」ばかりを読んでいる学生に、「事実ではないこと」を読み、「自分ではないほかの何かになってみると、世界がどれほどちがって見えるのか」、それを体験してもらうこと、これが「体験型授業」の大きな目的なのである。

#### ・ 詩作の方法

次に、実際に「書く」作業に入る。"Fishbones Dreaming" をモデルに、詩を書いてもらうわけだが、初めて英詩を読んだばかりの学生にいきなり書けといってもとまどうだけなので、簡単に英詩とはなにかについてふれなければならない。しかし、これは英文学の授業ではないので、あまり知識を詰め込みすぎないように気をつける必要がある。「教える」という形式をとらず、学生自身に「詩」と「いつも授業で読んでいる散文」はどう違うか、考えてもらう形式をとってもよいだろう。詩の内容理解だけにとどまらず、リフレインやリピティションがどんなリズムを生み出しているのか、ディテールが描かれることにはどんな効果があるのか、たくさんの動物名がでてくる効果はなにか、トーンやムードはどのように生まれているのかなどについて、学生から指摘してもらい、それについて簡単に説明するという形式をとりながら、学生が詩作するときに参考になる情報を与えていくのも一つの方法である。

時間が許せば、"Fishbones Dreaming" 以外の詩をいくつか読んでみると、「詩と散文の違い」がより明らかになり効果的である。また、「詩」というと「現実ばなれて実生活と

関係ない」と拒否反応が強い場合には、実は詩が我々の日常生活にあふれていることを実感させることも効果がある。その一例であるが、ロサンゼルスタイムズ紙の記事は、政治家の演説や売れている商品の名称、広告のキャッチコピー、映画のタイトルなどを挙げながら、詩で使われるアリタレーションという本来「高尚だとされる技法」が日常生活のなかで頻繁につかわれすぎて、安っぽくさえなっていることを指摘している。<sup>10)</sup>音が効果的に使われると記憶に残りやすいので、詩のテクニックが宣伝や商法に応用されている例である。あるいは、もっと身近な例として洋楽の歌詞を挙げることもできる。洋楽に親しみを持つ学生は多いので興味をひきやすい。歌詞を例に、頭韻、脚韻、リフレイン、リピティション、比喩、擬人化、アポストロフィ、リズム、トーンなどを説明し、詩作時に役立つような情報を与えると、より作成意欲がわくようである。<sup>11)</sup>

詩を書く作業は次週までの課題となり、多くの学生が困惑顔で教室を去ることになるが、はじめは自信がなかった学生たちも、書いているうちに懲りだして、最終的には「思った以上によくできた作品」を持ってくるようであった。自信作であれば、当然誰かに読ませたく（聞かせたく）なるものであるし、同時にクラスメートがどんな詩を書いたのか興味もわくものである。<sup>12)</sup>

詩を書くことのメリットとして、英語で書くこと、それも、英語で自己表現することに

関心をもたせることができることが挙げられる。また、最近の学生はただ座って講義を聞いているよりも、自分たちでプレゼンテーションをしたり、ディスカッションをしたりする参加型授業を好む傾向にあるようなので、読むことよりも書くことのほうが、学生の興味をひきやすいことが挙げられる。<sup>13)</sup>

課題ではモデル詩 "Fishbones Dreaming" に沿い、「もし、私が『どこどこ』にいる『なになに』だったなら」と想像してもらおう。「何」になるか、その題材を決めたら、その「何か」になったつもりで、「何か」の気持ちを想像し、リフレインを利用しながら過去へ過去へとさかのぼる。そして、過去の幸せだった日々にとどりついたところで詩が終わる、というのが基本パターンである。Writing Poetry のエクササイズでは、具体的に「海底に沈む何かの骨になり、どのようにしてそこに行きついたのか、何の骨なのか、一人なのか大勢なのか、海底のまわりには何があるのか、自分をとりかこむ環境はいったいどんなものなのか」と細部を想像しながら、その「もの」の人生をふりかえり、死から生へとさかのぼってもらうことになっているのだが、私の授

12) 詩を読むことと書くことは切り離せない。詩作をするには、多くの詩を読まなければならないからだ。しかし、語学授業では学生に多くの詩を読ませることは困難であるし、「体験型授業」では詩を読んだことのない学生に詩のおもしろさを体験してもらうことが重要なため、詩を読むことと書くことのどちらが先であるべきかについて、ここでは議論しない。また、詩人育成を目的としている授業でもないのだから、学生の詩に文学的価値があるか否かについても議論しない。文法ミスについても同様で、英作文の練習を目的にしているわけではないので（英作効果があるとすれば、それは副産物的効果であると考えている）ここではそれについて議論しない。

13) 英作文の練習になるかといえば、一概にそうともいえない。詩を書くことと学生のライティングの力がのびるかどうかは、別問題であると考えている。しかし、少なくとも、英語で表現するという点に関心を持たせることができる。

10) Bakerによる "Poetry of Popular Patter: Artful (and Awful) Attempts at Alliteration." (2004年5月31日)という記事。

11) あまり自由にするよりは、ある程度ルールを与えたほうが、学生はより高度な技術を使って詩を完成させようと意欲的に取り組むように感じた。教えすぎても、教えなさ過ぎても問題があるので、このあたりはクラス全体の英語力をみながら、調整するしかないようである。

業では、学生にはもっと自由に想像して、好きなものになり、海底でも、ゴミ箱でも、クローゼットの中でも、好きな場所を選び、好きなものになり、そこから詩を書けばよいと、なるべく寛容になり、学生が個性的な発想、自由な発想を楽しみながら課題をこなせるようにしたつもりである。そのなかで、韻をふめればふんでみる、比喩が使えるなら使ってみるなどのテクニクにも挑戦するようほどこしてみた。

・ 学生の作品例を通して

学生の書いた詩と、詩作についての学生からの感想やコメントを例に議論をすすめたい。多くの学生が擬人法を使いこなし、多くの詩に個性を発揮した「自分にしかできないユニークな発想」がいかされていた。まず、サッカーボールの視点から書かれた詩をみてみたい。

He [a soccer ball] was kicked by many people.  
Hurt every day when the game was played.  
Had no time to rest.

He didn't like to be this way.  
He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he was in Olympic game.  
He screamed for an hour and half.  
Finally he lost his conscious.  
Woke up from deep sleep, he was on a  
trash can.

...

( "Soccer Ball"より抜粋 )<sup>14)</sup>

この詩に添えられた学生の感想にあるように「サッカーボールの気持ちになって」書いており、サッカーボールが「蹴られて痛がっている」様子が描かれている。学生は、まず蹴ら

れる「痛み」を想像している。そして、オリンピックの時には一時間半の試合の間中悲鳴をあげつづけたあげくに気絶してしまうほどの「痛み」であると、この「痛み」に対する想像を具体化している。さらに、目覚めるとゴミ箱に捨てられている無残なサッカーボールの人生へと想像の世界がひろがっているのがわかる。学生は自作について「本来は、使われてなんぼだと思いますが、詩ということで自由な発想で書きました」と感想を述べているが、人間の視点(いつもの自分の視点)であれば「使われてなんぼ」だと思ふボールも、ボールの視点からみればそこには違う世界がひろがっているのである。

次のビーチパラソルの詩では、パラソルのことを "he extended his arms greatly on the beach" と、傘がひらいている状態を両手をぐっと広げているようだと言語を使って表現している。学生が無機物を題材に選び、それをまるで生きているかのように描いていることも、想像力を働かそうという意志のあらわれであろう。一生懸命に両手をかざし、人間のために影をつくるビーチパラソルの様子と、そんな「彼」を乱暴に扱い、海に置き去りにする人間の身勝手さが対照的に描かれている。

The beach umbrella whose bones were broken lay under the wild sea.  
He overlooked his surroundings, and there were

14) 青山学院大学経営学部四年生の作品。論文中で引用する学生の詩とコメントについてはすべて匿名とし、文法上のミス(時制の誤りで意味の混乱をまねきそうな箇所)については多少改めたところもあるが、学生が韻やリズムに注意して書いている場合も多く、間違えであっても意味は充分通るであろうと判断し、基本的には間違えも含め学生の原文を忠実に載せるようにした。下線部と[ ]は筆者が加えたものである。



dirty beach sandals, dead fish, and a plastic bag.

He didn't like to be this way.

He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he extended his arms greatly on the beach.

He was violently treated by people.

Even when the sun was covered by clouds  
and it became a storm,

no one noticed [him] but he stood still alone.

Then, he was flown by the strong wind.

...

Back to hot summer he liked, he looked at  
the smiling faces,

and [he] was hearing many laughing voices.

Then, he received the sea breeze,

and he extended both arms under the sun.

When the day finished, he waited for the  
next day with joy.

He liked to be this way.

He dreamed hard to try and stay there.

( "Beach Umbrella Bones Dreaming"  
より抜粋 )<sup>15)</sup>

"Even when the sun was covered by clouds and it became a storm, / no one noticed [him]" のところでは、人間の快樂のために身を粉にしてつくした「彼」が嵐で吹き飛ばされても誰も気にもとめない情景を、ビーチパラソルの視点から描き、取り残された「彼」のさみしさやむなしさを表現している。

この "Even if the sun was covered by clouds

and it became a storm" の行では、Cの音が集まるよう、また次の "no one noticed but he stood still alone." のところでは、STの音が二回、Lの音が二回連続するよう、音にも工夫をこらしていることがわかる。さらに、次のスタンザでは、"smiling faces / laughing voices"と韻を踏んでいる。"was hearing" という用法は文法上間違っているが、学生はきっと "ing" の音をここに集めることに集中していたのであろう。<sup>16)</sup> この詩は英作文のクラスを受講していた一年生の作品である。通常このクラスでは三週間ほどかけて "one paragraph writing" という十二～十五行ほどの英作文を完成させていたことを考えると、この学生が一週間で自作にこれだけの工夫を取り入れながら、これだけの長さのものを完成させてきたことは、学生が詩作に真剣に、熱意と興味を持って取り組んだことを示しているといえると思う。

学生が真剣に詩作に取り組み、そして、実のところ詩作に熟中していることは、自分の選んだ「もの」にあまりにも感情移入するあまり、いつのまにか三人称から一人称に移行してしまう学生がいることからわかる。

Used cell phone lay in the drawer.

He was the only one for her.

But now he's not.

New one has appeared.

He didn't like to be this way.

He turned the light off and dreamed back.

Back to when he was in her bag roughly shaken.

16) "was listening to" にすれば解決できる問題であるが、ここでは文法上の問題についてではなく、想像力や音に注目したいため、あえて議論しない。

15) 東洋英和女学院大学一年生の作品。

In the pocket of the bag with his friends of  
keys, tickets, and her handkerchief.  
He wasn't treated with politeness like when  
he first met her.  
But every time he received e-mail or a call, he  
let her know without fail.

...

Back to when he first met her.  
That day, she gazed me [him] and seemed  
happy.  
She was full of curiosity about how to use  
him.  
He was treated carefully and not to get  
hurt.

He liked to be this way.  
He dreamed hard to try to stay there.  
(タイトルなし)<sup>17)</sup>

この詩は、少女が新しい携帯電話を買ったために使われなくなってしまう携帯電話の気持ちを、携帯電話の視点から描いている。ビーチパラソルの詩同様、人間（携帯電話の持ち主）にじゃけんに扱われても、献身的につくす「もの」の気持ちが描写されている。携帯電話は「目をとじない」と考え、リフレインを "He turned the light off" と書き換え、ライトを消し真っ暗にして過去を夢みる携帯電話の様子を描く工夫もみられる。

この詩の中で携帯電話は "he" で描かれているのだが、最終連で描かれる「彼」と「彼」を買おうする少女との出会いの瞬間だけ、携帯電話が "me" と一人称に変化してしまっている。 "That day, she gazed me [him] and seemed happy" というその人称の変化は、

17) 青山学院大学経営学部四年生の作品から抜粋。

無意識におこなわれたものであろう。文法のミスであるといってしまうとそれまでだが、<sup>18)</sup> 携帯電話の視点から書いていたからこそ、詩がすすむにつれ携帯電話に感情移入し、少女は「私をみつめている」と思わず表現してしまったのではないだろうか。みつめられた携帯電話になりきっているからこそ起こる間違いであり、想像力のたくましさを感じさせる。

同様のことが、次の鉛筆の詩にも起こっている。この詩を書いた学生が「過去に戻るにつれて、削られて痛かったことや、シャーペンに人気を取られて寂しかったと思うと同時に、鉛筆を女の子にしてトムという少年に使ってもらってうれしかった気持ちや、木である彼女が工場で黒鉛という相方に出会ってひとつになれた喜びを表現することによって少女らしきなども表現してみようと思って、そこに気をつけながら作りました」と述べているように、この詩は、鉛筆の木の部分である「彼女」が、鉛筆の芯になる「彼」と恋に落ち、ひとつになった喜びを語る場所でおわる恋の詩でもある。

...

Back to when she [pencil] was wood.  
She was growing up by blessing rain.  
One day she was cut and taken to factory.  
She met fated partner there. His name was  
black lead.  
We [they] fell in love and became one  
( pencil )!

( "Pencil Dreaming" より抜粋 )<sup>19)</sup>

18) この詩を読めばこの学生の英語のレベルは初歩的な間違いをするレベルではないことがわかるので、単なる文法的なミスではないだろう。

19) 青山学院大学経営学部四年生の作品。

木であった「彼女」は切り倒されて工場へ連れて行かれてしまうが、そこで運命の「彼」（鉛筆の芯）に出会ってハッピーエンドということに、作者の意図した「少女らしさ」を感じるが、さらに興味深いのは、出会って恋に落ちる瞬間が "they" ではなく "we" になっていることである。「私たちは恋に落ちて、そしてひとつになった」と鉛筆の喜びをまるで自分の喜びのように語っている。

このような三人称から一人称への移行は、何人もの学生の作品にみられた現象である。この現象の共通点は、どのケースでも必ずといっていいほど、詩の最後のほう、特にクライマックスともいえる幸せの絶頂を描くときに起こるということである。これは、学生が詩を書いているうちに、だんだんと主人公である「もの」に感情移入していつていることを示唆しているのではないだろうか。

このように「もの」の気持ちになって詩を書いているならば、前述の携帯電話の詩を書いた学生のように、「……文を考えながら、机の引き出しに入っている昔の携帯電話たちを思い浮かべて、かわいそうになってきました。もっと大事に使おうと思いました」という感想を持つ学生がでてきたとしても不思議はないだろう。特に、クラスメートとペア（あるいはグループ）になり朗読と批評を行う作業を通して、その傾向が強くてだ。自転車について詩を作った学生は、「この [ 放置された自転車についての ] 詩を書いているのは、家にあるパンクしたまま放置している自転車のことです。最近乗らないのでそのままにしていた上、直りそうもないので、捨てようかと思っていたのですが、この詩を書いているうちに急に愛着がわき捨てるのがかわいそうになってきました」と自作について述べており、朗読を聞いたクラスメートは「ゴミになってしまった自転車がどこに連れて行かれるのかわからなくて不安になっているという表

現が良い」と評価し、最後に「実家においてきた my 愛チャリが心配になってきた……」と感想を述べている。<sup>20)</sup>

学生の感想をみても、「実際に詩を書いてみて、一つのコト（物）についてこんなに真剣に考えたことはなかったので、今回の題材（雑巾）にかかわらず、物の一生もさまざまだなあと感じた」り、クラスメートのつくった座布団にされたふるい着物の詩を読み、「時間の幅が広がってよかった。彼女 [ 着物の生地 ] はいろんなものになってた。もともと着物だったのに、ざぶとんにされたら、私もいや」と感じたり、「最後まで使ったほうが物はうれしいかもしれないが、最初の目的とちがう用途で使われたら、イヤな思いもするのかなと思った」など、今まで考えたことがなかった視点から「もの」について考え、さまざまな感じ方をしていることがわかる。これは、学生が詩を書き読み聞くことを通して、日常生活のありふれた出来事や「もの」を、新しい視点でとらえることを体験していることのあらわれであるといえるだろう。<sup>21)</sup>

鉛筆がシャーペンに、古いタイプの携帯電話から新機種へという時代の流れとともに忘れ去られ捨てられる「もの」の気持ちをテーマに選んだ学生も多かった。

A Broken deck lay on the damp soil.

He was cold, lonely, and shiver.

20) 東洋英和女学院大学二年生のペアワーク。

21) 学生は「課題」として作業をしているので、学生の感想を100%文字通り捕らえていいとは思っていない。優等生的な答えを意図的にしている学生もいるだろう。しかし、これまでの経験では学生は100%の本音は言わないかもしれないが、それほど大きな嘘もつかないものだと感じている。つまらない課題や教材の場合、学生は率直に「つまらない」と不平を言うことも多いように思う。

He couldn't stand what he is.  
He tried to rewind the tape hard.

...

( "Broken Deck Dreaming" より抜粋 )<sup>22)</sup>

この詩を書いた学生は、壊れたカセットデッキを選んだ理由として「新しい機材がどんどん出てくるなか(例えばビデオ DVD、ラジカセ MDコンボ)使われなくなってしまったということを書きました。"what he is" は『今の自分』という意味で書きました。サビ [refrain] の "tape" はこの壊れたデッキの『記憶のテープ』ということも表したつもりです。最初の "damp soil" は、産業廃棄物として不法処理されてしまったというような意味です」とコメントを残している。今の学生にとって「カセットテープ」というものはすでにレトロなものであるようだが、テープを巻きもどすという行為と、記憶を巻き戻して過去へさかのぼるという行為を平行にしているところは興味深い工夫であるし、必要なくなったカセットデッキを空き地や山道に不法廃棄物として捨てるという社会問題への意識もみられる。

詩という形式を通して、自分の意見や主張を表現しようと試みた学生が多かったことも、注目すべきであろう。"Whalebones Dreaming" という詩を書いた学生は、海水温度の上昇で鯨が苦しんでいる様子や、海水汚染のせいで鯨が気分が悪くなっている様子を描き、環境破壊の問題を訴えている。<sup>23)</sup> また、病気で死んでいく少年について描くことで、日本の孤島に医者がないという問題を訴えたり、わりばしの人生について描くことで資源の無駄使いについての問題意識を表現したりと、さまざまな社会問題が詩の題材として使われ

22) 東洋英和女学院大学二年生の作品。

た。詩の題材を探すという行為が、日常や社会を見直すきっかけを与えたのであろう。

わりばしを題材に選んだ学生は、コメントで「わりばしになったつもりで書くのはちょっと変な気持ちもしましたが、お手本 (fish-bones) もあったのでスムーズにできました。不思議なもので、書いているうちに『わりばしの気持ち』になっており、資源の無駄使いについて改めて考えさせられるきっかけにもなりました」と述べている。<sup>24)</sup> 詩を書いた本人が、自分の詩に影響を受け「わりばしや資源の無駄使いはやめよう」と思うところからも、「詩を書く」という体験が持つ影響力の大きさがうかがえる。この詩に関するクラスメートの感想は、「やっぱり、人間は植物と共生

23) 東洋英和女学院大学二年生の作品。

...

Back to when he [a whale] was hot in the sea  
 because temperature climbed due to human's  
 environmental destruction.

There were octopuses and cuttlefishes and dolphins  
 and beautiful shelf of corals.

At one time they were dancing, but now, they  
 disappeared, and whalebones were alone on the  
 sea bed.

He didn't like to be this way.

He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he felt bad in dirty sea.

With dirty oil and bad starfishes and many dead  
 fishes.

...

自分の主張を伝えたいと思うあまり散文になってしまっているが、文法に注意しながら丁寧に英文をしあげている。"bad starfishes" というのは、クラスで扱った「オニヒトデ問題」を意識した表現であろう。この学生は環境問題を訴えたいという情熱が伝わるコメントをつけているのでここに一部を抜粋する。「工夫したところは、鯨と人間による環境破壊を結びつけた所だ。特に、海水温度の上昇で鯨が苦しんでいるところや海の汚れにより鯨が気分が悪くなっている所に注目してほしい。」

24) 東洋英和女学院大学二年生。

していくべきだと思われました。[わりばしが] 男の口に入ったり、熱かったり、冷たかったりしたところが、工夫されていて面白いと思えました。[わりばしが] 森に戻ったときにはなんだかホッとしました。わりばしの使いすぎはやめようと思えました」となっている。模範解答のようでもあるが、友人の詩から影響を受けているといっても過言ではないだろう。

学生たちが詩を書き読むこと、特に誰かに自分の書いた詩を読み聞かせたり、クラスメートの書いた詩を読み聞かせてもらったりという行為を通して、知らず知らずのうちに社会問題や日常生活のあり方について考えたり、それを表現したり、それを聞いて共鳴しあったり、他者を理解したりすることを学んでいる様子が、学生のコメントから浮かびあがる。ペアやグループで行った朗読会を通して、学生が「私も実家においてきた自分の自転車が心配になった」とか「やっぱり資源は大切に使うべきだ」とコメントを残していることから、学生が詩を通してクラスメートに共感し、詩を媒体として、思想なり、想像なり、意見なり、感想なりを、シェアする体験をしていることがわかる。言い換えればこれは言語（詩）を用いて他者との相互理解を深める行為であり、コミュニケーションにおいてもっとも基本的で重要な能力である。英語教育におけるコミュニケーションとは、「英会話能力」だけをさすものではない。詩を書き読み聞かせる（読み聞かせてもらう）という体験を通して、いわゆる情緒教育的効果というもの、他者に共感したり同情したりする心をはじめ、「感受性」や「他者を思いやる心」などが育ち、「コミュニケーション能力」が向上する、と期待できるのではないだろうか。

詩の中で、想像と現実をブレンドする工夫もみられた。例えば、前述の鯨のかわりに人魚を使って海水汚染の問題を訴えるなどの工

夫である。"Mermaidbones Dreaming" は次のように始まる。<sup>25)</sup>

Mermaidbones lay in the sea bed of Enoshima.  
It was very cold and dark, so she was afraid.

She was a head, backbones and tail.

Near her, there were a dead flower that she [used to] put on [her] head,

shell that she used for breastplate,  
fishbones and crabshell.

Fish and crab were her friends.

People made dirty sea, so everyone was dead.

...

一行目の "Mermaidbones lay in the sea bed of Enoshima" では、人魚という想像上の生き物と、江ノ島という身近な海を組み合わせているところが笑いを誘う。人魚が生前使っていた花飾りや胸あてがちらばっているところなどディテールに工夫を凝らしているところには、「なるべく細かいところまで想像しよう」という意欲がみえる。そして、最後には、人魚や人魚の友人であった魚やカニなど、みんなが死んでしまったのは人間の環境破壊のせいだと、自らの意見を主張する形をとっている。朗読を聞いたクラスメートの感想には「こんな詩をつくれるのはすごいと思った。詩にこめられたメッセージが伝わってくるのがよかった」とある。書き手は自分のメッセージを英語で懸命に伝えようと努力し、聞き手も英語でメッセージを理解しようと努力する。詩を媒体に作者と読者は「メッセージ」をシェアし、共感する。さらに作者の努力に敬意をしめし、それをクラスメートに「すごい」という言葉で伝える。コミュニケーションのは

25) 共立女子大学一年生の作品。

じまりがここにみられる。

環境破壊以外にも人間の身勝手さに注目した作品は多かった。食肉用の動物や革製品、檻にとじこめられ自由を奪われた動物などである。動物園の動物が故郷を夢みる詩や、フライドチキンやハンバーガーに加工された肉が動物によみがえっていくという形式は多くみられ、実にさまざまな生物（豚、鳥、牛はもちろん、イルカ、ペンギン、ライオン、白熊、高尾山のサル、グッピーなど）が登場した。これらは、ただ感傷的になり「かわいそう」というだけの詩で終わっているわけではない。

次の "Rabbit Dreaming" にはうさぎが登場する。"Rabbit lay in a drawer" という一見何事かと思われる一行からスタートするが、二行目で降で、この「うさぎ」はうさぎの毛皮でできたマフラーであることがあかされてゆく。<sup>26)</sup>

... she was a scarf.

An old woman had her around woman's neck.

She was kept back into a drawer besides winter.

マフラーにされたうさぎは女性の首にまかれて暮らすわけだが、「冬以外は、たんすにしまわれたまま」との一行からは、「たんすにしまわれたままでは寂しい」とうさぎが感じていることが伝わってくる。さらに過去にさかのぼると、このうさぎはかつては学校のペットとして飼われたいこともあることがわかる ("... she was a pet in school. / She was popular among children." )。作者はそんなうさぎに同情するのではなく、冷静に、うさぎの宿命は「ペットになるかマフラーになるか」し

26) 共立女子大学三年生の作品。

かなかったのだと述べる ("... she was a wild animal. / Human aimed at her. / Her fate was a pet or scarf." )。残酷であるようだが、これが現実であるという客観的な視点である。<sup>27)</sup>

革靴になる牛を描いた学生は「使い捨ての世の中で、靴もそのような存在として捉えられているきらいがある。で、革靴になってみたかったわけである。皮も素材はもともと生きものであって、それを殺して私たち人間が履いているということ認識しなければならない。そのように考えれば、今以上にものを大切にするのではないだろうか。殺された動物の視点でものをみたかった」とコメントしている。主題だけではなく、技法についても「靴ができるまでというか、流通工程も含めて書いたところ [を工夫した] 事実を多く述べることで読者に考える余地を与えた」と、意識的に工夫を凝らし詩を完成させていることがうかがえる。

Calf shoes lay in the garbage dump.

He was worn out.

He was down at the heel.

Soon he would be burnt.

He didn't like to be this way.

He recollected the past.

Back to when he was sold on the shop.

Various kinds of shoes were on sale.

Soon he was bought.

He didn't like to be this way.

He recollected the past.

27) この詩を書いた学生が女性であり、当時(2004年)若い女性間のファッションとして毛皮の小物(鞆やマフラーなど)がはやっていたこともあわせて考えるとさらに興味深い。

Back to when he was made in factory.  
Soaked in chemicals and tanned.  
 So he turned to shoes.

He didn't like to be this way.  
 He recollected the past.

Back to when he was killed.  
Skinned and separated.  
 So he was sold as food and leather

He didn't like to be this way.  
 He recollected the past.

Back to when he was on grasslands.  
 Run with friends.  
 The breeze was pleasant.

...

( "Calf Shoes Fate"より抜粋 )<sup>28)</sup>

「使い捨て文化」に対する疑問や、捨てるということに関する環境意識、さらに生き物を殺した上で我々の生活が成り立っていることを認識して生きていこうという主張など、さまざまな要素をからませている。

技法的にも、さまざまな工夫が凝らされていることがわかる。「かかとがぼろぼろになるまで履き古された」というディテールに凝った表現が読者に与える影響を考慮し、"on the shop / on sale" と似た組み合わせで行末の形をそろえ、リフレインをモデル詩と同じにするのではなく "He recollected the past." と独自のものに変えオリジナリティーを出し、<sup>29)</sup> 頭韻 ("skinned and separated")、脚韻 ("grasslands / friends")、S音をなるべく集めるな

28) 青山学院大学四年生の作品。

29) "shoes" は複数形なので、"he" ではなく "they" にすべきであるというような文法的な議論はここではしない。

ど、授業でふれた詩の技法をできるかぎり多くもりこんでいる。

声高に主張するのではなく、パロディー的手法で読み手に判断させるという技法を使った学生もいた。

"Bush Dreaming"

Bush sits in a chair in the white house.  
 He was tired. He was lonely. He had no friend.

Soon he would be expelled from the white house.

He didn't like to be this way.  
 He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he stood still on the spot.  
 There's name "ground zero".  
 He lost the world trade center. He lost the pentagon.

He didn't like to be this way.  
 He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he was elected as the President of the United States.  
 They said "he was good for nothing". They said "his father and his wife are wonderful.  
 But he is too bad."

He didn't like to be this way.  
 He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he went to university.  
 Everyday was fun. Everyday was great.  
Everyday was shining.

He lived a full life.

He liked to be this way.  
He dreamed hard to try and stay there.<sup>30)</sup>

時事英語的クラスで、アメリカの社会問題を扱っていたクラスだったことも影響しているのかもしれないが、ブッシュ大統領を嘲るような詩を書いている。しかし、「ブッシュ反対」と声高に主張するのではなく、「人々がブッシュ大統領はあまりにもひどい」と悪口を言うという形式でその気持ちを伝えようとしているところに工夫がみられる。リペティションを意識的に使用し、"stood still on the spot" や "wife are wonderful." など頭韻に気をつけ、リズムや音に注意を払おうとする意欲もみられる。コメントには「全体的にあまり具体的に書かないようにし、読む人がいろいろ想像できるようにした(つもり)」と控えめに書かれているが、その意図するところは充分この詩にあらわれていると思う。

意見や主張だけではなく、「心の動き」を表現しようとする試みもあった。"Still Dreaming" は "An old man lay in a crimson blood / A stranger stabbed him / Nobody was approaching him" (年老いた男は深紅の血のなかに横たわっていた / 見知らぬ奴が彼を刺した / 誰も彼に近づいてこなかった) という衝撃的な死のシーンから始まる。<sup>31)</sup> そんな「彼」は、四十年間勤めあげた熱心な社員であったが "His subordinate's failure forced him to quite / Nobody wanted him anymore" (部下の失敗のせいでやめさせられ / もはや誰も彼を必要としなかった) という過去を持っている。子供時代までさかのぼっても、「彼」には幸せな過去がみあたらない。

30) 青山学院大学四年生の作品。

31) 青山学院大学四年生の作品。この学生はあえてピリオドをうたずに詩をしあげているので、そのままの形で引用している。

Back to when he was a child  
His parents yelling to each other as usual  
He wasn't a desired child  
Nobody wanted him from the beginning

各連の最終行を "nobody" でそろえている。"nobody" が反復されることで、「彼」の孤独を強調し、不幸な「彼」を印象付けようとしているのだろう。

詩を読みすすむにつれ、「孤独な男像」ができあがっていくよう工夫し、それを利用して、最後のスタンザをドラマティックに展開している。ラストでは、これまでのリフレイン "He didn't like to be this way / He shut his eyes and dreamed back" も効果的に利用されている。この詩の終盤の展開をみてみたい。

He didn't like to be this way  
He shut his eyes

Suddenly he found himself hugged so tight  
It was his wife  
She was crying, shed flood of tears

"Not that bad"

He liked this way  
He shut his eyes and he did not dream anymore

最初のシーンと最後のシーンをうまく繋ぎ合わせ、詩を結んでいる。突然見知らぬ人に刺され、血を流しているにもかかわらず、誰にも助けてもらえなかった彼が、これまでのように過去を夢みようと「目を閉じる」と、突然強く抱きしめられていることに気が付く。妻が泣き叫びながら抱きかかえているのだ。そして、それに気が付いた「彼」がつぶやく「それほど悪くないじゃないか」という一言に



は、それまで「彼」が夢みた過去の数々の不幸を認めたくなくて、「それほど悪い人生じゃないな」と思う「彼」の安堵がこめられている。「彼」は、死ぬ間際に自分の人生を肯定する言葉をつぶやき死んでゆくのだ。「彼」が安堵を覚え死んでゆくことは、「彼がそれ以上夢みなかった」という最終行からも読み取れる。

次の詩は、自ら命を絶った「私」の人生を回想する形をとりながら、自殺に至った「私」の心境を表現している。<sup>32)</sup>

"What I Was"

Here I lie on the sea bed.  
How long has it been, since I am this way?  
So cold and dark, all alone.  
My ribs are about to fade away.

I wasn't like this long ago.  
I thought hard to recall what I was.

I was standing on a cliff.  
Depressed and shocked, all alone.  
Nothing to do, nowhere to go.

I wasn't like this long ago.  
I thought hard to recall what I was.

32) 「心の動き」あるいは「感情」が表現されている詩の例をいくつか挙げているが、詩の中の "I" 「私」が、その詩を書いた学生自身だと解釈しているわけではない。ここでは、学生の詩の内容を分析することが目的ではないので、「私」が詩を書いた学生自身の気持ちを表現しているのかどうかについては議論対象外とする。また、詩作が学生心理を知る題材になるかどうかについても、議論対象としない。学生自らが「私の体験」だと言及している場合、自分の主張や気持ち、葛藤、経験などを反映させたいという想いで書いたとコメントに明記している場合を除き、学生の詩をコンフェッショナル・ポエムのようにとらえることはしていない。

I was wondering around the city,  
with nothing of my own.  
I had lost my company, lost my family, I  
was all alone.

I wasn't like this long ago.  
I thought hard to recall what I was.

I was working hard to achieve my goal.  
I had a family, a comrade, a company of my own.  
My house filled with warmth and comfort,  
laughter everywhere.  
I wasn't at all alone.

I was like this long ago.  
I thought hard to stay like that. <sup>33)</sup>

崖からとびおりた「私」が海底に横たわっている。さかのぼるにつれて、「私」が、事業に失敗し、家族をはじめすべてを失い、自殺に至ったことがわかる。しかしそんな「私」にも、笑顔にみちた家庭があった時代、自分が目標をめざし懸命に働いていた時代があったのだ。"I thought hard to recall what I was." というリフレインには、「本来の自分自身」を思い出そうする気持ち、「私はこんな人間ではないはずだ」という想いがこめられているのだろう。

この詩には、オリジナルリフレインをはじめ、韻、リピティション、音など、さまざまな工夫がこらされている。一連目は、"way" と "away" で韻を踏んでいる。三行目 "So cold and dark, all alone" と八行目 "Depressed and shocked, all alone" とでは、構成が似た形がとられている。"Nothing to do, nowhere to go" も同様だ。十三行目 "nothing of my own" と十八行目 "a company of my own" と

33) 青山学院大学四年生の作品。

を対比させることで、「私」の境遇のコントラストを強調している。十九行目 "laughter everywhere" では "er" の音を重ねやわらかさをだすことで、幸福な家庭の雰囲気を出している。二十行目は "I wasn't alone at all" と通常の文章では書くところを、前半から繰り返されてきた "all alone" をここでも崩さないよう倒置を利用して "I wasn't at all alone" としている。<sup>34)</sup>

このクラスでは、時間の余裕があったので、R, L, M などの音がかさなるとやさしい、まろやかな雰囲気をだすことができること、反対に P, T, K など破裂音を重ねると楽しさや軽快などをだせること、詩では韻を踏むために語句が倒置されることがあることなど、モデル詩の他に W. B. Yeats の "The Lake Isle of Innisfree" を使い、説明した。さらに新聞の記事 "Poetry of Popular Patter: Artful (and Awful) Attempts at Alliteration" を読み、音の生み出す効果について教授している。それらの知識を総動員した形で、学生はこの詩を作成したといえるだろう。詩の知識を詰め込むことは目的ではないが、英詩の形式やテ

34) この学生の英語能力を考慮するとただの文法ミスだとは考えにくく、意図的に並べ替えたと解釈できる。引用した詩はまったく手直してはいない。

35) 詩の技法にかぎらず、授業で扱ったことはさまざまな形で詩に現れていた。授業内容を反映した内容の詩が多く書かれたこともそのひとつである。前述の「オニヒトデ」のケースのように、授業で環境問題について読んでいた場合は環境問題の詩が、医療問題を扱っていたクラスでは「孤島に医者がない」などの問題が扱われることも多かった。これは授業構成上の問題でもあるが、普通の授業で詩を扱っているわけではないので、ある日突然授業で詩を扱うことには無理がある場合も多い。そのため、普通の授業と関連させて詩を扱う工夫が必要な場合もある(例えば、アメリカの新聞で政治的記事を読んでいたクラスでは、まず、新聞記事で「頭韻」と「政治演説」について読み、それから詩を読み書くという作業にすすむなど)。

クニックについてほとんど知識を持ち合わせていない学生が多くを占めるので、クラスの英語能力や時間的余裕などを配慮しながら、学生のレベルや興味に合った情報を与えることは必要であり、このように多くの情報を与えていれば、それらをなるべく使いこなそうと、学生がより熱心に詩作に挑戦する傾向は多くのクラスでみられた現象であった。<sup>35)</sup>

次の女子学生の書いた詩には、「働き続け死に至る女性(キャリアウーマン)」という題材が使われている。

#### "Career Woman Dreaming"

A career woman lay on the hospital bed.  
She went into coma.  
Soon she would go to heaven.

She didn't like to be this way.  
She shut her eyes and dreamed back.

Back to when she remained conscious.  
She talked with friends and family.  
But she administered many medicine everyday.

She didn't like to be this way.  
She shut her eyes and dreamed back.

Back to when she entered the hospital.  
She thought she can get out of the hospital.  
She received a minute health examination.

She didn't like to be this way.  
She shut her eyes and dreamed back.

Back to when she worked hard everyday.  
She was living brilliantly.

But she was very tired, because she

worked.

She didn't like to be this way.

She shut her eyes and dreamed back.

Back to when she joined a company.

She was tensed up in new world.

She didn't like to be this way.

She shut her eyes and dreamed back.

Back to when she was a university student.

She spent a happy campus life everyday.

She had enjoyable time.

She liked to be this way.

She dreamed hard to try and stay there. <sup>36)</sup>

モデル詩にそって、少しづつ過去へさかのぼっている。ここに、「今楽しいキャンパスライフを送っている自分」と「そこから社会へでていくことの不安」まで読み取るのは過剰かもしれないが、キャリアウーマンが思い出す「幸せだった過去」が大学時代の楽しい日々であるというのは、等身大の作者の姿を思わせる。また、働き始めた「キャリアウーマン」についての描写についてのスタンザのみがたった二行になっているのは、漠然と「新世界で緊張する」ことは予想できても、それ以外に具体的な想像ができなかったからかもしれない。これらの要素から学生が卒業後の「働く社会」を未知なる世界として感じ、詩を通して働くことへの不安を表現しているようにも思える。<sup>37)</sup>

36) 東洋英和女学院大学二年生の作品。

37) 前述の通り、この詩を書いた学生が自分を投影して詩を書いているとはかぎらず、作品中のキャリアウーマンと自分の将来の不安とをかさねているかどうかは不明。これはあくまでひとつの解釈である。

もっと明白な形で、自分の気持ちと「もの」（あるいは他者）の気持ちをエコーさせるというテクニックを使った詩もみられた。病気で死の床にある友人の「心」と自分（書き手）の「心」を重ねて綴られた詩 "Noriko Dreaming" はその一例である。"Noriko lay on the hospital bed. / She was dying of late lung cancer. / She could recover no longer." から始まるこの詩は、少女期の誕生日パーティのシーンで終わっている。コメントに「Noriko は私の友人です。彼女は末期の肺ガンのため、死を迎えようとしています。数ヶ月前、彼女は『死ぬ前に結婚したかった』、『悔しい』と言っていました。今は『誰にも知られずに死にたい』と言っています。今回詩を書くことになり、真っ先に彼女の顔が浮かびました。詩の中に誕生日を取り入れたのは、幼い頃から彼女の誕生日がいつも豪華だったからです」とあるので、作者は詩中の「彼女」と幼少の頃からの友人であるのだろう。幼い頃から知る友人の気持ちと、その死を見守ろうとする自分の気持ちとの両方を、詩という媒体を通して表現しているといえる。また、クラスメートの感想にもあるように「最後に誕生日のシーンを入れたことで、『生』と『死』の差をはっきり感じ」させる効果をもった詩になっている。

「ノート」を題材に選んだ学生の詩は、"I am a notebook. / When I was born, all page was white."（私はノート / 私が生まれたとき、すべてのページは真白だった）から始まる。<sup>38)</sup>そして、"Now my notebook is written only half. / After this I want to be written new words more and more."（今私のノートは半分しか埋まっていない / これから私はもっともっと新しい言葉を書かれていきたい）で終わっている。一人称の「私」がノー

38) 青山学院大学四年生の作品。

トなのか、ノートを持っている人間なのか、最後でははっきりしないという問題があるが、これは、学生が「ノート」と「ノートを持っている自分」を重ねようとした結果起きてしまった混乱であると思われる。「ノートに文字が埋まっていくこと」を「自分の(心の)ノートに文字(知識)が増え、成長していくこと」を重ね合わせすぎたため、人称に混乱が起きていると思われるが、その試みは評価されるべきであろう。コメントには、「自分の心や脳をノートに例えました。最初はなにひとつ言葉を知らない状態で生まれてくるが、成長して行くに連れて単語を覚え文章も作れるようになり、自分の気持ちなども言葉で表現できるようになります。そうなってくると時には人を傷つけてしまったりと失敗をしてしまうこともあり、その事実を消すことはできないがそれを反省して成長していきます。まだ自分の心の大きさや知識は半人前ですが、これからもどんどんノートがうまっていくように努力したい」と書かれている。

また、車に轢かれた猫の心境を描くことを選んだ学生が、「以前に、私が運転中に猫を轢いてしまったときとても辛く、轢いてしまった直後に」感じたことを詩に書いてみようとした試みだと述べていることも興味深い。猫を轢いてしまったという出来事について、「とても辛い」というのは「轢いた側」からの視点であるが、それを、詩では、「轢かれてしまった猫」の視点から描いているのである。これは、ひとつの出来事を多面的にみることで新世界を発見する試みだともいえるだろう。

"Cat Body Dreaming"

The cat body lay on the side of the road.  
She was powerless, hurt and hardly breathing.

Soon she will be in Heaven.

She didn't like to be this way.

She shut her eyes and dreamed back.

Back to when she was beautiful, and rushed  
into the street.

And then she was run over.

She bounded just like a tennis ball.

She didn't like to be this way.

She shut her eyes and dreamed back.

Back to when she lay herself down between  
the nice bushes with her kittens.

She fed them everyday.

She played with grasses for them everyday.

She didn't like to be this way.

She shut her eyes and dreamed back.

Back to when she was beautiful.

She fell in love with the next door cat.

She took a nice walk in the woods with him  
everyday.

She didn't like to be this way.

She shut her eyes and dreamed back.

Back to when she was a kitten.

She had mother, father and one baby sister.

She wished everyday:

"someday I will have a family exactly same as  
mine."

She liked to be this way.

She dreamed hard to try and stay there.<sup>39)</sup>

39) 青山学院大学四年生の作品。

なぜ子猫の世話をしていた時代や、隣の家の猫と恋に落ちてデートをしていた日々がいやで、さらに過去を夢みようとするのかなど、多少つじつまの合わない点も感じられるが、自分が轢いてしまった猫にも猫の人生があったこと、それが突然奪われてしまったことを描こうとしていることが読み取れる。息も絶え絶えになったこの猫にも、子猫をかかえた母猫であった時代や、恋に落ちて毎日デートをしていた日々があったのだということ。この想像力こそが多面的に考える能力を育て、他者の立場に立って考えられる「心」をも育てるのではないだろうか。

これらの例からもわかるように、詩を書くことは、発想の転換、そして、視点を変えて物事をみることの訓練になる。さらに加えて、詩という形式を使えば、他者の視点や気持ちを想像し、それについて表現しながら、同時に自分の意見や気持ちをも表現できる。これは身近な題材を使いながらできる視野を広げるための良い練習法だといえるのではないか。

「ひとつのもの(出来事)を両面からみる」という試みが反映した詩の例として、追い回されるハエと追い回す人間の姿をコミカルに描き出している詩がある。「とてもおもしろい詩」とクラスメートに述べられたこの詩は、"Flybones Dreaming" というタイトルそのものが、その「おもしろさ」をあらわしている。<sup>40)</sup> そもそもハエに骨があるのだろうか、と読者を笑わせ、さらに、"... he was flapped with a newspaper by the people" (彼は新聞で人間にはたかれ)、"... the insecticide spray was following my [his] body. / I [he] was choking..." (殺虫剤の霧がつきまとい/ゲホゲホしていた)と、ハエの受難を描き続け、ハエがついに人間につかまりティッシュにくるまれゴミ箱に捨てられるまでの過程をおもしろお

かしく描く。<sup>41)</sup> 最終連でハエが思い出す「幸せだった過去」のシーンが、"... flying lightly in the living room." だというささやかな幸せであることも、ほほえましい。ハエを追いかける人間と追いかけられるハエの両面がバランスよく表現できているからこそ伝わるおもしろさであろう。

ユーモアのセンスにとんだ詩をもうひとつ紹介したい。"Squashed Mosquito Dreaming" で蚊を題材として選んだ理由として、学生は「これからの季節蚊が多くなるし、大量虐殺が発生すると思う。やつらは血を飲んで満足そうなので、あえて加害者の立場になって、深層心理を追求してみようと思った」と述べている。人間の血を吸おうとする蚊と、血を吸われまいと蚊を退治しようとする人間とのバトルが、蚊の視点と人間の視点との両方から表現されている詩である。

Squashed mosquito lay on the cold floor.  
He was less than 1mm tall.  
Soon the spiders would come for him.

He didn't like to be this way.  
He shut his eyes and dreamed back.

Back to when he was about to drink blood beer.  
Fat lady sleeping, not knowing he was near.  
But felt him on the cheek, heard his boom.  
Fast attack hit, squished him, the sound  
roar in the room.

He didn't like to be this way.  
He shut his eyes and dreamed back.

...

41) ここでも、詩の終盤で殺虫剤をふきかけられ苦しむシーンになると、突然三人称だった「ハエ」が一人称になっている。

40) 共立女子大学二年生の作品。

Back to when he was satisfied with blood.  
His mission was completed, the belly swelled.  
Feeling good with satisfaction,  
Sleeping with nutrition.

He liked to be this way.  
He dreamed hard to try and stay there. <sup>42)</sup>

つぶされた蚊が冷たい床に横たわっているところから始まり、次の行では「彼は一ミリ以下だった」と蚊の大きさを客観的に述べている。「冷たい」というのは、横たわる蚊にとって「冷たい」のであろうことを読者に想像させる効果的な表現である。しかし次の行で「一ミリ以下」と述べているのは、明らかに人間の視点である。この絶妙な両面性が、詩のおもしろさをかもしだしているといえる。

第三連で、蚊が血を飲む行為を "drink blood beer" と表現しているのもユニークで笑いを誘う。血をビールに喩え、人間がビールを飲むときの気分で蚊がいそいそと出かけ、いざ血（ビール）を飲まんとする瞬間を描き、蚊の喜びや喉の渇きも似た血への欲望を伝えている。学生のコメントに「HIPHOPが好きなので、頭韻よりも、末尾をそろえることを念頭にしてみました。文法的に少し無理があると思われませんが、Rap調に歌ってみると、聞こえは気持ちよいはず！」とあるが、この連でも、"beer / near"、"boom / room" と脚韻を踏んでおり、短い文章をつらねることで軽快なリズムを生み出し、蚊の動きと蚊をたく「太った女性の手」の動きのスピード感を出す工夫がされていることがわかる。殺すか殺されるか、吸うか吸われるかという臨場感を、コミカルにリズムカルに描いている詩である。

42) 青山学院大学四年生の作品より抜粋。

最後の例として、ユーモラスなようでせつないような "Loveletter Dreaming" を挙げ、結論に導きたい。 <sup>43)</sup>

Loveletter lay in the garbage dump  
He was about to be recycled to new letters  
His master's gleam of hope vanished

He didn't like to be this way  
He shut his eyes and dreamed back

Back to when he was in the trash can  
Beside old tissue and waste of candy  
He was torn and rumped by a girl his master  
loved

He didn't like to be this way  
He shut his eyes and dreamed back

Back to when he was in her friend's hand  
Her friend looked at him and smirk  
His master's love was spread to all of school  
friends

He didn't like to be this way  
He shut his eyes and dreamed back

Back to when he was in her hand  
She looked at him and she had cool eyes  
His master's love didn't reach her heart

He didn't like to be this way  
He shut his eyes and dreamed back

Back to when he was on the desk

43) 青山学院大学三年生の作品。ピリオドがないのも、"loveletter" が一語として扱われているのも原文通り。

His master wrote loveletter hardly [ passionately ]<sup>44)</sup>

He wished his master's love do well

He liked to be this way

He dreamed hard to try and stay there

ふられた少年と捨てられたラブレターは、せつなさを共有している共同体として描かれている。捨てられたラブレターが「リサイクルされて新しい手紙に生まれかわる」という発想の豊かさは、手紙同様恋もリサイクル（再生）されることを連想させ、ユーモラスであると同時に、この恋は終わったが、また新たな恋が生まれるであろうたくましさをも予感させる。

ラブレターを書いた少年を「ラブレターのご主人様」と比喩的に表現していることはコミカルであるが、忠実に主人に尽くし、討ち死にしていく（捨てられてしまう）ラブレターの忠誠心はせつなさも生んでいる。「ご主人様」が懸命に手紙（自分）を書いているのを知っている「彼」は、書かれながら「ご主人様」の恋の成就を切実に願う。その「彼」が、破り捨てられ、飴の包み紙やティッシュに囲まれゴミ箱にいるときのむなしさはいかばかりであろうかと思わせる。それも、「彼」の「ご主人様」が恋した少女の手で破られ、くしゃくしゃにまるめられるのであるからたまらない。

ラブレターの擬人化が効果的に使われていることは、ラブレターが「ご主人様」の恋する少女に「冷たい目でみられ」たと表現するだけで、そのときにラブレターが感じたであろう気持ちを読者に想像させ、さらに、その気持ちがラブレターを書いた少年の気持ちと重なっていることを感じさせる力を持っている

ることからもわかる。きっと両者とも、その瞬間に、明るくない未来、恋の終わりを感じとったことであろう。同様に、少女の友人が「彼」をみてにやにや笑ったときに「彼」が感じた感情は、噂が学校中に広がってしまったときに少年が感じた気持ちと重なっている。書かれたラブレターと、ラブレターを書いた少年という両サイドから、ひとつの出来事（ラブレターを渡して振られるという事件）が描かれているからこそ、ユーモラスでせつないという複雑な感情を伝える詩になっているのだろう。

意図的であるにしろ、無意識であるにしろ、このように両サイドから物事をみてみれば、複雑さを生み出す。この複雑さは、他者への理解を育てる上で重要なものであり、また、自己理解をも深める重要な要素である。善か悪か、正しいか正しくないか、面白いかつまらないか、好きか嫌いか、うれしいか悲しいかのように単純にはわりきれない「コミカルなようでせつないような」ことを感じたり、表現したりすることは容易ではない。しかし、複雑であるからこそ、人生はおもしろいのであり、人間社会はそのような複雑さがからまりあってなりたっているのである。自分が感じるように、他者が感じているとは限らない。表があれば裏もある。矛盾すると思われる感覚が同時に心に混在することもある。自分の心に芽生えるそんな複雑さを表現し、他者の心にある複雑さにも理解を示そうとすること。これは、コミュニケーションの第一歩であり、基本的で重要な要素でもある。

．おわりに

学生の書いた詩を読み、その多様性、独自性、豊かな発想、自由で大胆な想像力、自己表現への欲求、新しいことへのチャレンジ精神、自分の力を試したいという意欲に驚いた。

44) このあとの一行を省略している。

多くの学生が「初めて英語で詩を書いた」と述べていたが、その初めての体験に、新鮮な気持ちで取り組んでいたことがうかがえた。習ったばかりの頭韻や脚韻などを取り入れて詩を書いてみたいとチャレンジした学生が多かったことから、新しいものへのチャレンジ精神が十分に伝わってくる。大学入学時には、学生は少なくとも六年間英語の授業を受けてきているわけだが、その間知りえなかった新しい情報を得るといことは、学生たちにとっても興味深いことであつたのだろう。新しい知識を得たり、新しい発見や体験を得ることは、だれでもうれしいものである。

詩が教育の役に立つかどうかというのが論点の一つだったため、詩を通して何を表現するかということや、詩を使って自己表現することに特に注目して考察をすすめてきたが、「傷ついた野生動物」というテーマを選びながらも、環境問題を訴えているわけではなく、ただ純粋に、傷つきながらも懸命に生きる鳥の一生を描き、「想像したものについて書くのって楽しい」と感想を述べた学生もいたことをつけ加えておきたい。なぜ詩を書く必要があるのか、詩は役に立つのか、ということなど問題にせず、「楽しいから書く」。このように感じる学生がいるにもかかわらず、今の大学教育のなかで、詩について学ぶチャンスさえないというのであれば、それは教育理念のうえでも問題であろう。多くの学生にとって、社会にでてから詩について学ぶチャンスは少ない。大学で英詩にふれる機会を設けないのであれば、彼（彼女）らが英詩について学ぶチャンスは生涯なくなってしまう可能性が高い以上、大学教育の中で少しでも詩について教えることには大きな意味があると思われる。

学生から「詩の授業のあとで、いつもロックをきいてるから、歌詞をよくみてみたら、歌詞に、アリタレーションとかライムとかが

すごい使ってあって、びっくりした」とのコメントもあった。また、今まで授業で読んできた新聞記事の見出しの多くに頭韻が使われていることに気付き、感激していた学生もいた。彼（彼女）らにとって、これらは新しい発見であり、発見した喜びを伝えたかつたのであろう。「知る」ということで、人生がより豊かになる。あたりまえのことかもしれないが、それを「体験できる」授業としても、英詩を読み書くという授業は効果的だつたように感じている。

詩作を通して新しい「発見」を楽しんだ学生は、予想以上に多かつたのではないかと思っている。例に挙げた学生の詩を読めば、学生の詩が「宿題だから仕方なく書いた」というレベルではないことは明らかであるし、「良い詩を書きたい」という意欲を感じる詩が多かつた。「体験型授業」を通して、詩はある特定の人々のためにだけあるものではなく、すべての人の日常にいきているものだとして学生も感じてくれたのではないだろうか。「詩っておもったよりもおもしろい！」ということをしは伝えることができたのではないかと思っている。

また、詩を書く機会を与えたことで、学生に自分の意外な才能を発見させることができたことも、予想外の喜ばしい効果であつた。「自信作だから、一番初めに読んでください」と伝えにきた学生や、クラス全員に堂々と朗読して聞かせる役を立候補する学生が複数いたことは、私の驚きでもあり喜びでもあつた。これらの事実は、文学部以外にも、想像を楽しみ、想像した世界について書くことを楽しみ、英語の音とリズムを楽しみ、英詩を楽しむ学生が存在することを証明していると思う。

とはいえ、この「体験型授業」には今後の課題も多い。最も大きな問題点は、学生の英文法上のミスをどこまで直すべきかという現



実的な問題である。英詩の場合は韻やリズムなどの関連があるので、添削は非常に困難になる。また、学生の書いた詩の評価基準が曖昧になりがちという問題もある。学生の詩の文学的価値を問わない場合、彼（彼女）らの詩をどのように評価するべきなのか。

モデル詩を選ぶことも難しい。すぐれた英詩の例はいくらでもあるが、日本の大学生の英語力で十分に理解でき、興味を持てるような内容であり、長さも適当で、専門的な知識がなくても楽しめる詩となれば、当然限られてくる。モデル詩は無量大数ではない。その上、苦勞して題材を集め準備をしても、多くの学生ははじめのうち露骨に詩に対する嫌悪感を示すため、詩に興味を持たせるまでの教員側の体力の消耗はすさまじい。繰り返し述べてきたように、一度理解し詩作に取り組みはじめれば、英詩に興味を持つ学生も多いのだが、そこにたどりつくまでには、通常の授業の何倍もの労力が必要になる。最終的には報われる努力であるが、学生の詩に対するアレルギーを除去する効果的な方法をあみだすことも必要であろう。

問題点や改善点も多く、「体験型授業」は教える身にとっては楽ではない授業である。しかし、「役に立つか立たないか」あるいは「実用的か否か」だけで判断するのではなく、人生をより豊かにするような教養と知識を与えることも、大学の役割の一つであろう。また、詩は「生活に無関係」で「不必要」と思われがちであるが、実のところ私たちの生活に無関係なものではなく、日常のあちこちにあふれているものである。その事実を認識し、それに対する知識を深めることは決して無駄ではないだろう。こう考えると、大学英語教育の中で詩が占める位置は必ずしも低いものではないはずである。

英詩を教えることの「効果」はみえにくい。英詩を一篇書いたからといって、突然、感情

表現や想像力が豊かになるわけでもない。それでも、英語で詩を書くという体験を通して、学生が、自分の気持ちや考えを表現し、他者の気持ちや考えを理解することの重要性や必要性を学び、想像の世界に遊ぶ楽しさを感じたり、創造することのおもしろさ発見したりする可能性がある以上、学生ひとりひとりに「英語で詩を書く」という体験を与えることには、言語教育のうえでも、情緒教育のうえでも、大きな意味があると思われる。

#### < 参考資料 >

・ 学生の選んだ詩の題材の例

- .1 . 動物園の動物（さる、くま、ライオンなど）  
水族館の魚（イルカ、グッピー、ペンギン）、ペット（犬、飼っていたネコ、飼っていたセキセイインコなど）
- .2 . 自然界の動物（ヤドカリ、サメ、魚の親子、高尾山の猿、シャチに食べられてしまうアザラシ、タコ、水鳥、猟師に撃たれ剥製にされる鹿、どこでも人間にいやがられ最後にはティッシュでくるまれて捨てられてしまうハエ、カメ、蚊、母親がたばかれてとりのこされた子クジラ、恐竜など）
- .3 . (昔の彼女が編んでくれた、もう着なくなって引き出して眠っている) セーター
- .4 . 人形、うさぎのぬいぐるみ、ティペア
- .5 . 固有名詞（ドラえもん、たまちゃん、James Bond、浦島太郎をのせた亀、ブッシュ大統領、たまごっち、スーパーマリオにでてくるピーチ姫、タイタニック号にのって溺れ死んだ人など）
- .6 . 末期癌で死をむかえようとしている自分の友達によせて
- .7 . 中絶された胎児
- .8 . つきあっていた女性が既婚者だと知らず、その夫に殺されて幽霊になる孤独なゴースト
- .9 . おにぎりになるために育てていた米粒
- .10 . 戦争で傷つきベッドに寝ている男性、戦争で死んだ兵士
- .11 . プレスレットのピースの粒（プレスレットが切れて、友達と別れ別れになり、地面に落ちてしまう）
- .12 . (池に落ちたままほっておかれ風邪をひく) サッカーボール
- .13 . 病床の人、病気の少年、過労死で死んでいくキャリアウーマン、病気になる妻にも相手にされなくなり自殺する男性
- .14 . 海賊、(父の形見を海に落としそれをとるうとして海におちて死んでしまった) 船長、漁師、

(地球に移り住もうとして海で溺れ死んでしまう) 宇宙人、吸血鬼、人魚、海で死んだ貴族の夫人、(海底で見つけた宝箱を取ろうとして溺れ死ぬ) カップル、失恋した少女

.15.(シャーペンが使われるようになって出番が減った)鉛筆、(MDプレーヤーのせいで捨てられた)テープレコーダー、(持ち主が新しい携帯を買って使われなくなった)携帯電話、指輪、傘、腕時計、スニーカー、鏡、バレエシューズ、(職人さんが愛情をもってつくった)机、捨てられたTシャツがゴミ処理所で燃えるまえに過去を回想、廃車になった電車が開通式の晴れ晴れしかった過去の自分をおもって、少女の手からはなれ海をわたっているうちにわれてしまった風船、切りたおされ薪にされ窯でくすぶる灰、薪、アクセサリーケースにしまいこまれた真珠、牧場の牛だったころを夢みる革靴、タバコの吸殻、髪の毛(床に落ちていた毛、白髪など)

.16.(肉となり料理される)鳥・豚・牛(鶏肉、鳥の骨、フライドチキンの食べかす、ラーメン用のチャーシューになる豚、羊肉など)

.17.時間

.18.海に沈んだ遺跡、嵐で難破した船

.19.枯れて捨てられたブーケの花(母の日のプレゼントだったカーネーション、ブライダル・ブーケ、鉢植え植物など)

.20.(破壊されている)森、(環境破壊され死にゆく)地球

.21.氷(雪雨水雲空気とさかのぼる)雲

.22.(ゴミ箱の中の)ティッシュペーパー、(ゴミ箱に捨てられた)りんごの芯、(兄弟から引き離され捨てられた)ブドウの粒

.23.ビルを建てられ永遠に土に埋もれることとなったタイムカプセル

. 学生からのコメントの例(本文中に引用したものの全文もあるので重複する部分もある)

.1.「LとFをたくさん使い、恐竜の弱さをイメージした。DとGの音で[恐竜の]強さと大きさをイメージした。」(注)学生がなぜこれらの音を選んだのかは不明だが、音を意識しながら詩を書く工夫をしていることは明らか。

.2.「水槽の中で海草にしっぽがからまり取れてしまったので、今、彼女[金魚]には頭と背中しかないところがポイント。彼女が幸せだった時の話[連]はほかの話[連]よりやさしく表現したつもり。」

.3.「何を題材について書くかという所に本当に手間取った。」

.4.「次々と悲しい出来事に遭遇する鳥の話にした。以前までは美しい歌声も、すばらしい羽も持っていたが、歌の練習のしすぎで声はかれてしまい、それがストレスとなって自慢の羽も抜け落ちて

てしまい、泣きすぎて目も腫れてしまう。見るにも哀れになってしまった鳥にまたしても災難が起こる。転んで足を怪我してしまい、うまく飛ぶことができなくなってしまふ。そんな状態で途方に暮れながら、やっとの思いで海の上を飛んでいるが、ついには力尽きて飛ぶことすらできずに、海の底へ沈んでしまうという話だ。うまく表現できずに、細かな部分までは伝えられなかったかもしれない。しかし、自分以外の何かになって想像して書くことはとてもおもしろかった。英語で詩を書くのは初めてで難しかったけれど、詩というよりは物語のように考えてやってみた。事実を伝える文を書くよりも、このような自分の想像で書く方が、大変だけれど、おもしろいと思った。」

.5.「この詩[放置された自転車について]を書いていて思ったのは、家にあるパンクしたまま放置している自転車のことです。最近乗らないのでそのままにしていた上、直りそうもないので、捨てようかと思っていたのですが、この詩を書いているうちに急に愛着がわき捨てるのがかわいそうになってきました。」同じ詩に関するクラスメートの感想:「ゴミになってしまった自転車がどこに連れて行かれるのかわからなくて不安になっているという表現が良い。実家においてきた my 愛チャリが心配になってきた……。」

.6.「日本の孤島に医者がないという問題を扱い[病気で死んでいく少年について]書きました。今と昔の共通点と違いを表現したくて書きました。『人々の頭でゆれる光』は、眠る『彼』の顔色を見る家族の頭で明かりが見え隠れして、ゆれているように見えるのを表現しています。」

.7.「わりばしになったつもりで書くのはちょっと変な気持ちもしましたが、お手本(fishbones)もあったのでスムーズにできました。不思議なもので、書いているうちに『わりばしの気持ち』になっており、資源の無駄使いについて改めて考えさせられるきっかけにもなりました。」同じ詩に関するクラスメートの感想:「やっぱり、人間は植物と共生していくべきだと思われました。[わりばしが]男の口に入ったり、熱かったり、冷たかったりしたところが、工夫されていて面白いと思いました。[わりばしが]森に戻ったときにはなんだかホッとしました。わりばしの使いすぎはやめようと思いました。」

.8.「実際に詩を書いてみて、1つのコト(物)についてこんなに真剣に考えたことはなかったもので、今回の題材(雑巾)にかかわらず、物の一生もさまざまだなぁと思った。」

.9.「17年間ずっと一緒に暮らしていたネコの最後の瞬間を思い出して書きました。小さな命から伝わってくるものを話にしました。実際のことだったので、書くのはそんなに大変ではなかったけれど、思い出したりすると、少し悲しくなりました。」

- .10. クラスメートのつくった座布団にされたふるい着物の詩を読んで：「時間の幅が広くてよかった。彼女〔着物の生地〕はいろんなものになった。もともと着物だったのに、ざぶとんにされたら、私もいや。」同じ詩を読んだ他のクラスメートの感想：「最後まで使ったほうが物はうれしいかもしれないが、最初の目的とちがう用途で使われたら、イヤな思いもするのかなと思った。」
- .11. 「[ 蛍光灯の交換についての詩を書いて ] 世代交代という屈辱のひとつを表してみた。こういうことを考えると、物を大切にしようと思ってしまった。生き物とは違って、ガラスとかはリサイクルできるからまだいいかなと思う。」クラスメートの感想：「交換されるとき、新しい蛍光灯にやけるという発想がすごいと思う。」
- .12. 「[ スニーカーについての詩を書いて ] ……はく時には毎日のようにはくのに、新しいスニーカーを買うと急にはかなくなってしまう。そんなせつなさをあらわしたかったのですが、かなり難しかったです。詩は、日本語 英語という形で作れなかったので苦労しました。韻をふむとかは全然思いつきませんでした。でも英語で詩を書くのはちょっと面白かったです。」
- .13. 「普段吸っている煙草を見ていて考えました。この葉は、そもそも光合成をして養分に変換する為のもの。それを吸っているんだと。煙草の葉の本来の目的と現実のギャップを表現出来たら、禁煙活動家が〔この詩を〕CFに使ってくれるかもしれないですね？」
- .14. 「この詩では、色々な所でペットとして飼われ、最後は年老いた野良犬になり、道端で死んでしまった、そのような犬の死体から考えて書いてみました。ペットブームの今、ペットの飼い方をペットの立場に立って考えてみるべきなのかもしれません。ただ、現在、ペットとしての動物の多くは人間に飼いならされていて、野生に戻ることに難しいと思います。だから、人間の家族の一員として、しっかりと飼ってあげることがペットにとっての幸せだと思います。この詩を書く上で、ペットの側から人間に対する批判という意味で、きつい言葉や鋭い発音の単語を使うようにしました〔beaten with a stick, dead dog, angry, submit to his feeder, etc.〕」
- .15. 「……文を考えながら机の引き出しに入っている昔の携帯電話たちを思い浮かべてかわいそうになってきました。もっと大事に使おうと思いました。」
- .16. 「……ビーズが一番幸せなときはいつなのかを考えました。ビーズになる前の材料のとき、自

分を選んでもらうとき、作っているとき、身につけてもらっているとき。きっと自分がアクセサリになってみんなに見てもらったときが幸せなのではないかと考えました。……がんばってalliterationをしたかったのですが、題名とあととところどころしかできませんでした（wind, wouldとか、dirtyとdangerousとか、piece of beads, broken beads くらいです）。声に出して読んでみましたが、特に5と7の段落が読みにくかったです。どうしたら読みやすくなるのが気になります。」

.17. 「過去に戻るにつれて、削られて痛かったことやシャーペンに人気を取られて寂しかったとおもうと同時に、鉛筆を女の子にしてトムという少年に使ってもらってうれしかった気持ちや、木である彼女が工場で黒鉛という相方に出会ってひとつになれた喜びを表現することによって少女らしさなども表現してみようと思って、そこに気をつけながら作りました。」

#### < 参考文献 >

- Baker, Bob. "Poetry of Popular Patter: Artful ( and Awful ) Attempts at Alliteration." *Los Angeles Times*. 31 May 2004, A1+.
- Cook, Guy. "Making the Subtle Difference: Literature and Non-literature in the Classroom." *Language, Literature and the Learner: Creative Classroom Practice*. Eds. Ronald Carter and John McRae. London & NY: Longman, 1996.
- Kikuchi, Rina. *Living Voices from Dublin: Poetry of Brendan Kennelly, Eavan Boland and Paula Meehan*. PhD thesis, Chiba U, 2002.
- Koch, Kenneth. *Making Your Own Days: The Pleasures of Reading and Writing Poetry*. NY: Touchstone, 1999.
- , *Rose, Where Did You Get That Red?: Teaching Great Poetry to Children*. NY: Vintage, 1990.
- Sweeney, Matthew. "Fishbones Dreaming." *The Flying Spring Onion*. London: faber and faber, 1992.
- , "Not for Adults Only." *Times Educational Supplement*. 12 Jan. 1996.
- , "TES Young Poet of the Week." *Times Educational Supplement*. 6 Jan. 1995.
- , "Versed in Class." *Times Educational Supplement*. 10 Feb. 1995.
- Williams, John Hartley, and Matthew Sweeney. *Writing Poetry*. Chicago: Contemporary Books, 1997.